

独本土上陸作戦

——金博士シリーズ・3——

海野十三

青空文庫

およそ新兵器の発明にかけては、今日世界に及ぶものなしと称せられる金博士きんはかせが、とつぜん謎の失踪しつそうをとげた。

おどろいたのは、ここ上海シャンハイ市の地下二百メートルにある博士の実験室に日参していた世界各国の兵器スパイたちだった。

実験室は、きちんと取片づけられ、そして五分置きに、どこからともなくオルゴールが楽がくの音ねを響かせ、それについて、

“余よは当分とうぶん失踪する。これは遺書いしよである。ドクトル金”

と、姿は見えないが、特徴のある博士の声で、この文句がくりかえし響くのであつた。

録音による遺書が、オートマテイツクに反復放送はんぷくされているのだった。

あの新兵器発明王金博士のとつぜんの失踪！

博士を監視していた五十七ヶ国のスパイは、いずれも各自の胸き部に、未だ貫通かんつうせざる死刑銃弾の疼痛とうつうを俄にわかに感じたことであつた。

一体、博士はどこへ行つてしまつたのであろうか。

人騒がせな博士の失踪は、精神錯乱さくらんの結果でもなく、況いんや海を越えて和平勸告わへいかんこくに行つたものでもなかつた。しかし金博士

の上陸したところは、スコットランドであつて、グラスゴー市の西寄りにある秘港ひこうグリーンノックであつた。

金博士は、上陸に際し、右足の踵かかとに微傷びしょうを負つたが、それはおりから折柄ちようど丁度、英軍の高射砲が襲来しゅうらいどくき独機を射撃中であつて、

その高射砲弾の破片はへんが、この碩学せきがくたいと泰斗の右足に当り、呪いにみちた傷を負わしめたのであつた。が、まあ大したことはなかつた。

「上陸第一歩に際し、イギリス官憲のみならず、イギリス高射砲隊からもこの鄭重ていぢようなる挨拶あいさつをうけようとは、余の予期せざりしところである」

と博士は、折から空襲実況中継放送中のBBCのマイクを通じて、訪問の初挨拶をしたのであつた。

接せつぱん伴委員長のカーボン卿きょうは、金博士が、あまりにも空爆くうばく下かに無神経でありすぎるのに愕おどろき、周章あわてて持薬じやくのジキタリスの丸が薬やくをおのが口こうちゆう中ちゆうに放りこむと、金博士を棧橋さんばしの上に積んだ偽装火薬樽ぎそうかやくだるのかげに引張りこんだ。

「ああカーボン卿、ドイツ空軍のために、こんなに行き亘わたつて爆撃されたのでは、借間しゃくまが高くなって、さぞかし市民はたいへんであろう」

「おお金博士。仰有おつしやるとおりです。借間の払底ふつていをはじめ、そのほかわれわれイギリス国民を困らせることが実おびただに夥しいのです。このときわれわれは、はるばる東洋から博士を迎え得て、千万トンのジャガ芋いもを得たような気がいたしまする」

「ジャガ芋とは失礼なことをいう、この玉蜀黍とうもろこしめ」

と、博士は中国語でいつて、

「この空爆の惨害さんがいを、余にどうしろというのかね」

「いやいや、余は何とも申したわけではない。博士どの。イギリス上陸のとたんに、ぜひとも御注意ねがわねばならぬことが二つあります」

「二つ？ 何と何とかね」

「一つは、さつき申し遅れましたが、味方の撃ちだす高射砲弾の害。もう一つは、おそろしきスパイの害。——とにかく街上でもホテルでも寢床の中でも、おそろべきスパイが耳を澄して聞かんとおぼしめ思召して、一切語りたもうなよ」

「本当かね。まるでわが上海シャンハイそつくりじや」

「故ゆえに、物事を、スパイや敵国人のため妨害されないうで、うまく搬はこぼうと欲すれば、それ、決して何人にも機密を洩もらすことなく、自分おひとりの胸たたに畳たたんで、黙々として実行なさることである」

「お前さんのいうことは、むずかしくて、余には分らんよ」

「いや、つい騎士倶楽部風きしくらぶふうの言葉になりましたが、要するに、自分の思しったとおりに仕事をやりとげるためには、機密事項は一切お喋しゃべりなさるなという忠言です」

「なるほど、壁に耳あり、後にスパイありというわけじやね。よろしい。今日只今より、大いに気をつけるもつと。尤も、わしはスパイ禍かをさけることなら、上海でもって、相当修業して来ております

わい」

「それを伺^{うかが}つて、安心しましたわい」

折から高射砲は、撃ち^うち方^{かた}やめとなり、往来はようやく安心できる状態となった。そこで瘠^{そうくつる}軀^く鶴^{つる}の如きカーボン卿は、樽^{づん}のかげから外に出て、一応頭上を見上げたうえで、樽^{づん}のかげの金博士の手を取つて、引張り出したのであつた。

「さあ、今のうちに急いで参りましょう」

「はて、余はどこへ連れていかれるのじやな」

「行先は、今も申したように、スパイを警戒いたして申せませぬ。しかし、向うへ到着すれば、そこが何処だかお分りになりますよ。グローブ・リーダーの巻三には、『ロンドン見物』という標^ひ

ようだい
題もとの下に、写真入りでちゃんと詳しく出て居ります場所です」

「ありや、行先はロンドンですかい」

「ロンドン？ あつ、それをどうして御存知ごぞんじですか。博士は、読どくしんじゆつ

心術くしんじゆつを心得て居らるるか、それともスパイ学校を卒業せられたかの、どつちかですなあ」

「あほらしい。お前さんが今、ロンドン見物の標題で云々うんぬんといったじゃないか。お前さんがたのここんところは、連日連夜のドイツ軍の空爆で、だいぶん焼きが廻っていると見える」

そういつて、金博士は、自分の頭を、防毒マスクの上から、こつこつと叩いてみせた。

ロンドンの地下ホテルの大広間で、国防晩餐会ばんさんかいが催もよおされている。

その大広間は、一いっけん見けんひろびろとしていた。ただ真中のところに、一つの卓子テーブルと、それを取囲む十三の椅子とが、まるで盆の真中に鉦ポタンが落ちていような恰好かっこうで、集っていた。そして卓上には、贅ぜいたく沢たくな料理が、大きな鉢に、山の如く盛り合わされ、そしてレットルを見ただけで酔っぱらいそうな古いウイスキーやコ

ニヤツクが、林のように並んでいた。

そのとき、広間の北側の扉が、さつと左右に開いて、金ぴかの將軍が十二人と、それから肘のぬけそうな黒縹子の中国服を着た金博士とが、ぞろぞろと立ち現れて、その設けの席についた。

「さあ、ぼつぼつ始めましょう」

「各自、好きなように、セルフ・サーヴィスをして頂きましたよ」

ボーイたちは、完全にこの大広間から追い出されていた。しかもこの料理は、五百パーセントの闇値段で集められた豪華な料理であつて、これ全て、遠来の金博士——いや、イギリス政府及び軍部が今は命の綱と頼む新兵器発明王の金博士に対する最高

の饗きょう 応おうであつたのである。

「さて、早速さつそくではあるが、金博士に相談にのつていただくことにする」

と、座長格の世界戦争軍総指揮官ゴンゴラ大将が口を開いた。

「なるべくなら、この御馳走を全部頂戴してのちに願いたいものじゃが」

金博士は残念そうにいう。

「いや、事が事として、ぐずぐずして居れないのです」

と、総指揮官ゴンゴラ大将は、かまわず話をすすめる。

「これは今夜はじめて諸君にかぎり発表する最高の機密であるが、実は、わがイギリス軍は、最早もはや如何いかんともすべからざる頽たい勢せいを一

拳に輓ばんかい回せんがために、ここに極秘ごくひの作戦を研究しようとしている。それは如何いかなる作戦であるか」

と、ゴンゴラ大將は、そこで大いに気を持たせて、一座を見廻した。

(おや、十三の座席は、縁起えんぎでもない)

將軍は、ちよつと顔を曇らせたが、胸の前で十字を切つて、

「それは外でもない。十三——いや、諸君、愕おどろいてはいけな

わがわがは、ここに極秘ごくひの独本土上陸作戦どくほんどじょうりくさくせんを樹立じゆりつしようと思

う者である」

一座は、俄にわかにざわめいた。將軍のなかには愕おどろいて、手にしていた盃さかずきを取落とす者もあり、嚙のみ下ろしかけていた若鷄わかどりの肉を

気管きかんの方へ送りこんで目を白黒する者もあつた。ただ平然として色を変えず、飲み且かつ喰くらう手を休めなかつたのは金博士ばかりだつた。

「独本土上陸作戦、それは英本土上陸作戦の誤植ごしょく——いや誤言ごごんではないか」

「否いな、断じて、独本土上陸作戦である」

「ほほっ、ゴンゴラ総指揮官の精神状態を医師に鑑定せしめる必要ありと思うが、如何に」

「いや、もう一つその前に、全国の空軍基地に対し、単座戦闘たんざせんとう機きにゴンゴラ將軍を搭とう乗じょうせしめざるよう厳げん重じゅう命令すべきである」

「その必要はあるまい。なぜと行って、ゴンゴラ將軍は、幸さいわいに
して飛行機の操縦が出来ないから、安心してよろしい」

ゴンゴラ総指揮官は、頬をトマトのように赧あかくして、卓たくを叩たた
た。

「何なんびと人が何といおうと、独本土上陸作戦を決行する吾輩の決意
には、最早変りはない。ドイツを屈くつ服ぷくせしめる途は只ただ一つ、そ
れより外に残されていけないのである」

一座は、尚も喧々けんけん囂ごうごう々々、納おさまりがつかなくなつた。あ
ちこちで、同志討どうしうちまでが始まる。

「なにも、そんな危い芸当をやらないでも、もつと確実に、しか
も安全にドイツをやつつける方法があるんだ」

「そんなことはないでしょう。自分は総指揮官の作戦に同意する」
「それは愚劣ぐれつきわまる。よろしいか。わしの考え出した作戦とい
うのは、至極しごく簡単かんたん明瞭めいりょうである。それは、ドイツに対して『わ
がイギリスは貴国を援助するぞ』と申入れれば、それでよろしい
のじゃ」

「なんだ、それは。敵国ドイツを助ければ、わがイギリスはいよ
いよ負けるばかりだ」

「それだから貴公きこうは、駄目だというんだ。ちと歴史を勉強しなさい、
歴史を。今度の世界戦争以来、わがイギリスが援助をすると
申入れた先の国で、滅びなかつた国があるかね。ベルギーを見よ、
和蘭オランダを見よ、チェツコを見よ、ポーランドを見よ、それからユ

ーゴを見よ。ギリシヤを見よ、しょうかいせき蔣介石を見よ。だから、われわれイギリスが、『ドイツよ、お前を助ける』と申入れただけで、ドイツも亦また、滅びざるを得ないであろう。これ、歴史上の事実から帰納きのうした最も正確にして且つ安全な作戦じゃ」

仲々一座の納りがつかないので、ゴンゴラ総指揮官は、席を立て、金博士のところへやって来た。

「金博士。吾輩の切なるお願いである。新奇なる兵器を作つて、わがイギリスの沿岸えんがんから発し、独本土へ上陸せしめられたい」

このとき、金博士は、ようやく卓上の料理を悉く胃の腑ふに送り終つた。博士は、ナツプキンで、ねちやねちやする両手と口とを拭ぬぐいながら、

「ああ余は遠く来た甲斐かひがあつたよ。ほう、美味満腹びまんぷくだ。はて、何といわれたかね」

と、取り済ました顔である。

「おお金博士。今も申すとおり、吾輩の切なるお願いである。新奇なる兵器を作り、わがイギリスの沿岸より発し、独本土へ兵を上陸せしめられたい」

ゴンゴラ総指揮官は、声涙せいのいとも共に下くだつて、この東洋の碩学せきがくに頼みこんだ。すると博士は、

「ああ、それくらいのことなら、至極しごく簡単にやって見せるよ」

「えつ、本当に出来る見込みがありますか」

「ありますとも。そんなことは、人造人間戦車の設計などに較くらべ

れば訳なしじゃ」

「おお、それが真実なれば、吾輩は天にもものぼる悦びよろこ——いや、とにかく大きな悦びです」

「しかしのう、ゴンゴラ大将。それについて、余は、篤とくと貴公と打合わせをしたいのじゃが、この席ではなあ。つまり、こう沢山の人々の耳に入れては、それスパイに買収せられた耳も交まじつていいるかもしれない。二人切りになれないものかな」

「ああ、そのことなら、吾輩としても、願ってもないことです。よろしい。では他の將軍たちを退場させましょう。おい諸君。君たちは一特別室いちちじへ遠慮せよ」

さすがに総指揮官の一声で、他の將軍たちは、ぶつぶつがやが

やいいながら、ゴンゴラ大将と金博士をそこに残して、元来た扉^{ドア}から出て行ってしまった。

「さあ、もう一杯、いきましよう」

「すこし廻りすぎたが、もう一杯頂戴するか」

あとは二人が水^{みず}入らずで向い合った。

金博士は、そのとき顔を將軍に近づけていった。

「今誓約したことは、必ずやります。しかし一体、独本土へ上陸
と行って、どこへ上陸すればいいのかな。ブレーメンかキール軍^{ぐん}
港^{んこう}のあたりまで行かなければ満足しないのか、それともドイツ
の占領地帯で、お手^て近^ぢかのドーヴァ海^{かい}峽^{きょう}を越^こえて旧^{きゅう}フランス
領のカレーあたりへ上陸しただけでも差^さ支^しえ^{つか}ないのか、一体ど

つちを望むのかね」

金博士に大きく出られて、ゴンゴラ総指揮官は、碧あおい目玉をぐりぐり廻わし、

「どつちでも結構ですが、一つ早いところ上陸して貰いたいですねえ。ドイツ兵のいる陸地へ、こつちからいつて上陸したということになれば、そのニユースは、ビッグ・ニユースとして全世界を震しんが駭がいし、奮ふるわざること久ひさしきイギリス軍も勇氣百倍、狂喜きようき乱舞らんぶいたしますよ」

「狂喜乱舞するかな。それはどうかと思う」

「いや、狂喜乱舞することは請うけあ合いいです」

「そうかね。そのところは、余にはよく呑みこめないが、とに

かく、上陸作戦をやるについて、あらかじめ予め種々、貰うものは貰って置きたい」

「ああ、これは申し遅れて失礼をしました。成功の暁は、博士のはか測り知られざるその勲功くんこうに対し、いかなる褒賞ほうしょうでも上じょうそ奏ういたしましょう。いかなる勲章がお望みのぞかな。ダイヤモンド十字章はいかがですな。また、何もイギリスの勲章に限ったことは無い。和蘭オランダの勲章はいかが、それともポーランドの勲章は。エチオピアの勲章でもいいですぞ。それともフランスの勲章にしますか」

「勲章など貰つても、持つて帰るのに面倒めんどうだから、いやじゃ。それよりも、当国とうこく逗留とうりゆう中は、イギリス製のウイスキーを

思う存分ぞんぶん呑ませてくれればそれでよろしい。今のうちに呑んでおかないと、きつとドイツ兵に呑まれてしまうからね」

「縁起でもありませんよ」

「しかしのう、ゴンゴラ將軍。さつき余が、貰うものは貰つて置きたいといったのは、そんなものではないのじや」

「え、勲章の話ではなかつたのですか」

「東洋人というものは、お主ぬしのように、左様さように貪慾どんよくではない。余の欲しいのは、白紙命令書はくしめいれいしよだ。それを百枚ばかり貰いたい」

博士は妙なことをいいだした。白紙命令書というのは、まだ命令の文句が書いてない命令書のことであつた。

「白紙命令書百枚もよろしいが、何にお使いですかな」

と、ゴンゴラ將軍は腑に落ちない顔。

「知れたことじゃ。お主から頼まれた一件を果すためには、万事極秘でやらにやならん。だから余だけが計画内容を知っていると
いうことにするには、白紙命令書を貰ったのが便宜べんぎなのじゃ。尚
その命令書には『追おっテ後ご日何等カノ命令アルマデハ本件ニ関シ総
指揮官部へ報告ニ及バズ』と但ただしがき書を書くから、予め諒承りようしよう
ありたい」

ゴンゴラ総指揮官は、遂に白紙命令書百枚を金博士に手交して、博士の手腕に大いに期待するところがあつた。

ところが、それから一週間たつても、二週間たつても、金博士が一向動きだしたという知らせに接しないのであつた。

将軍のところへ出入する情報局蒐集官たちは、決して、将軍から同じ趣旨の質問を受けるのだった。

「おい、金博士の動静についてのニュースはないのか。すくなくとも一卷のニュース映画になるくらいのもは持って来い」
将軍は、金博士の行動のニュースに飢えているのであつた。

情報蒐集官たちは、残念ながら、博士についてのニュース材料

の持ち合わせがなかった。それで次回から、せいぜい気をつけることにして、金博士の身辺しんぺんを獵りようけん犬の如く、或いはダニの如く、或いは空気の如く搦からみついて、何を博士が実行に移しているかを調べたのであった。

その結果は、毎日毎夜それぞれの情報蒐集官から、ゴンゴラ総指揮官のところへ集つてきた。

「金博士は、本日午前十時、セバスチアン料理店に現れ、午後二時まで四時間に亘りわた昼酒ひるざけをやり、大いに酪めいてい酹せり」

「ふん、大いにやつとるな」

と、ゴンゴラ將軍は次の報告書を取上げる。

「金博士は、本日午後二時十五分より、カセイ・ホテルに現れ、

飲酒三時間に及べり。午後五時三十分、たいしゆつ退出す」

「よく飲むなあ。身体をこわさなきやいいが……」

次の報告書には、こう書いてあつた。

「金博士は、本日午後五時四十五分、ピカデリー街に於て、数名の東洋人に襲撃せられ……」

「おや、これはニユースらしいニユースだ」

と、がいじよう総指揮官は、思わず前に乗りだして、さてその次を読むと、

「……がい街 上がに於て、ウイスキーのラツパ呑みを強要されしが、

それより博士の提案により、会場をコルコツト街裏がい通りのバー、

ホーンに於て一同揃つて痛飲つういんかい会が開催かいさいせられることとなり、

同夜午後十一時まで、つうけい通計五時間……」

將軍は、苦^{にが}り切つて、その報告で涕^{はな}をちんとかむと、紙屑籠^{かみくずかご}へ投げこんだ。

「金博士は、地酒窟^{じざけくつ}ランタンに現れ、午後十一時十五分……」
どこまで読んでいっても、金博士が酒を飲む報告書ばかりであった。將軍は、うんざりしてしまった。

気をつけていると、毎日毎夜、集つてくるどの報告書も、飲酒の実績報告ばかりであつて、その中に只の一枚も、「金博士は、机に向い、設計用紙を前にして、計^{けい}算^{さん}尺^{しゃく}をひねりつつあり」とか「金博士、只今、バーミンガムの特殊鋼工場^{とくしゅこう}へ、マンガン鋼^{こう}五十トンの注文を発せり」などという工作関係のニュースは入つていなかったのである。ゴンゴラ総指揮官は、飛行機にのつて

特殊飛行をやつてみたい衝動しようどうに駆かられて、弱つた。

ついにゴンゴラ総指揮官の勘忍袋かんにんぶくろの緒おが切れ、警衛隊に命令して、金博士をオムスク酒場から引き立て、官邸へ連れて来させたのであつた。そのとき金博士は、へべれけに大酩酊めいじやうのていらくであつた。

「うーい。こら、こんな面白くない酒場へ引張ひっぱつて来やがつて。

こーら、そこにいる大将。早くジンカクを持ちこい」

ゴンゴラ大将は、仁王様におうさまがせんぶりの粉こなを嘗なめたような顔をして博士のぐにやぐにやした肩を驚わしづかみにした。

「これ、金博士。いかに酒好きとはいえ、酒ばかり呑んで、吾輩との約束を無にするとは遺憾いかんである」

総指揮官は、きよくりよく極力腹の虫を殺して、春の海のようにおだや穏かに云つた。

「おお、お主はゴンゴン独楽こまのゴン將軍じやつたな。今聞いてりや、聞いちやいらねえことを余よに向つていつたな」

「吾輩は、三週間、いらいらして暮した。その間博士は酒ばかり飲んで暮した。例の仕事には、すこしも手がついていないではないか」

「あつはつはつはつ」と博士は笑つて、「お主は、そのことを心配しているのか。余はイギリス人のように、やるといつて置いてやらん人間とは違う。疑うなら、見せてやるものがある。さあ、余の右足をもつて、力一杯引張れ。おい、早くやれ。酒を飲む時

間が少くなる。なにしろイギリス製ウイスキーとも、間もなくお別れだからな。おい、引張れ」

ゴンゴラ総指揮官は、博士に催促さいそくされて、床に膝をつき、博士の右足をつかんで、えいと引いた。すると、すぽんと音がして、博士の右脚が、太腿ふともものあたりから抜けた!!

4

……と見えたが、驚くことはない、実は金博士が右脚に履はいて

いた肉色の超ちようながぐつ長靴が、すぽんと抜けて、ゴンゴラ將軍の手に残っただけのことであつた。

「ひやーっ」

千軍万馬せんぐんばんばの將軍も、これには胆きもを潰つぶし、博士の一本脚——ではない実は超長靴を、絨毯じゆうたんの上に放り出した。博士は、それを無造作むぞうさに拾いあげ、その中に手を入れると、やがて一枚の青写真を引張りだした。

「ゴンゴラ將軍。これをお目にかけてよう」

將軍は目をぱちくり。膝の上に青写真を展ひろげて、二度びつくり。

「これは、素晴らしい新兵器だ。一人乗りの豆潜まめせんすいてい水艇すいていのよう

だが……」

「將軍よ。これは初めて貴官と会見した日、宿に帰つてすぐさま設計したとようせんはてい渡洋潜波艇だ」

「ああ実に素晴らしい。さすがは金博士だ。これを如何いかに使うのですかな」

「これはつまり、一種の潜水艇だが、深くは沈まない。海面から、この艇ふねの背中ようやが漸く没ぼつする位、つまり数字でいえば、波面はめんから二三十センチ下に潜くぐり、それ以上は潜らない一人乗りの潜波艇だ」

「ふむ、ふむ」

「これを作ったわけは、如何なる防潜網ぼうせんもうも海面下二メートル乃至十数メートル下に張つてあるから、普通の潜水艦艇では、突破なは困難だ。また普通の潜水艦艇では、機雷きらいにぶつつけるかもしれ

ないし、警報装置に引懸ひっかかつて所在が知れるし、どうもよくない。そこでこの渡洋潜波艇は、海面とすれすれの浅い水中を快速で安全に突破するもので、つまり水上と防潜網との隙間すきまを狙ねらうものである」

「ほう、素晴らしいですなあ」

「しかし、これは試作しただけで、余は取り捨てたよ」

「おや、勿もつたい体たいない。使わないのですか」

「駄目じゃ。やっぱり相手方に知れていけないのじゃ。つまり海面と防潜網との隙間せきまを行くものではあるが、こいつを何千何万隻せきとぶつ放すと、彼岸ひがんに達するまでに、彼我ひがの水上艦艇に突き当るから、直ただちに警報を発せられてしまう。従ってドイツ本土上陸以

前に、殲滅せんめつのおそれがある。これはやめたよ」

「惜しいですなあ。すると、これは取りやめて、以来いらい自暴酒やげざけというわけですか」

「とんでもない。余はイギリス人とは違うよ。余は既に、ちゃんと自信たつぶりの新兵器を作った」

「それは、どういう……」

「莫迦ばか。現行兵器の機密が、他人に洩もらせるものか」

「でも、吾輩は総指揮官……」

「総指揮官として信用は出来ない。とにかく余は貴官と約束したところに従い、現実に独本土上陸をやって見せた上で帰国しようと思う。百の議論よりも、一の実行だ。実績を見せれば、文句はな

いじやろう」

「なるほど。すると博士御発明の独本土上陸用の新兵器は、目下ぞくぞく続々と建造けんぞうされつつあるのですな」

ゴンゴラ將軍の瞳かがやが耀やいた。

「その建造は、二週間前に終った。それから、搭乗員とうじょういんの募集にちよつと手間どつたが、これも一週間前に片づき、目下もっかわが独本土上陸の決死隊二百名は、刻々こくこく独本土に近づきつつあるところじや。これだけは話をしてやってもええじやろう」

「人員二百名は少いが、とにかく刻々独本土に近づきつつあるとは快報です。大いに期待をかけますが、果してうまくいくですか
な」

「なにしろ、独本土へ上陸しようというイギリス軍人の無いのは愕おどろいた。折角せつかく作つたわが新兵器も、無駄に終るかと思つて、一時は酒壇の底に一いつてき滴の酒もなくなつたときのよ様な暗澹あんたんたる気持に襲われたよ」

「しかしまあ、二百名にしろ、決死隊員の頭あたま数が揃つたは何よりであります。本官の名誉はともかくも保たもたれました」

「さあ、どうかなあ」

「えっ」といつているとき、幕僚ぼくりようが部屋へとびこんで来た。

「総指揮官。只今ドイツ側がビッグ・ニュースの放送をやつて居ります。事こと重大じゆうだいですが、お聴きになりますか」

「重大事件？ ははあ、あれだな。スイッチを入れなさい」

スイッチが入って、ドイツ放送局のアナウンサーの聲が高聲こうせい器きから流れだした。

「……繰返くりかえして申し上げます。本日午後五時、二百名より成るドイツ将校下士官兵の一隊は、イギリス本土よりわが占領地区カレ―市へ無事帰還きかんいたしました。これは、目下イギリスに在る金博士しんかいほこうきの発明になる深海歩行器しんかいほこうきによつて、ドーバー海峡四十キロの海底を突破し、無事帰還したものでありまして、実に劃期かつきてき的な大陸連絡でありました。因ちなみに金博士の深海歩行器というのは、直径三メートルばかりの丈夫なる金属球きんぞくきゆうでありまして、中に一人の人間が入り、局所照明灯きよくしよしょうめいとうにより、前方の機雷や防潜網を避さけながら歩行機械により海底を歩行出来る仕掛けになつて居

りますが、十分じゅうぶん ドーバー海峡下の水圧には耐えるようになって居ります。その他のことについては、機密になって居りまして、詳細をここに述べられませんのは遺憾いかんではありますが、尚なお今回の壮そ拳うきよのエピソードといたしまして、最初金博士は、この大発明兵器深海歩行器に搭乘する決死隊を、イギリス軍隊の中に求めましたが、何分にも赫々かつかくたるドイツ軍の戦績とダンケルクの敗戦を想起そうきし、一人の応募者おうぼしやもありませんので、遂に金博士は腹を立て、予て捕虜かねとして収容されありし前記二百名のドイツ軍人に独本土上陸の希望を問合といあわしたところ、一同大喜びにて、決死隊に応募し、遂に今回の大成功を見たものであります。……」

ゴンゴラ総指揮官まっかが真赤まっかになって金博士の方に振返った時には、

既に博士の姿は卓上の酒壺と共に、かき消すように消え失せていた。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第10巻」三一書房

1991（平成3）年5月31日第1版第1刷発行

初出：「新青年」

1941（昭和16）年7月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力…tatsuki

校正…まよ

2005年5月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

独本土上陸作戦

—金博士シリーズ・3—

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 海野十三
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>